

昔と今とこれからと

前生徒会長

矢吹 純

(百十八期)

二年間に渡る生徒会役員としての活動が終わった。昨年度より役員改選の時期がずれたため、実質二十五ヶ月の任期であった。高校生活の三分の二以上をこの活動に打ち込んだのだと思うと、我ながら驚く。

さて、私にとっては三度目の安積での夏だ。思い返してみると、二年前、つまり私が一年生の時には、安積はまだ共学化の途上だった。共学も四年目になると、それが当たり前のことになってしまう。共学化の実際を見ていない今の一・二年生には、完全共学化前のことは想像しがたいだろう。ふと、一昨年の紫旗祭で、上半身裸で中庭を走り回っていた先輩達が懐かしく

思い出される。そんな言い方をすると、ただの脱ぎたがりのように聞こえてしまうかもしれない。だが、彼らは安積の変動期を支えた一員である。また、三月に卒業した共学一期生、百十七期の先輩達は、共学化に際し最も多くの課題を乗り越えてきたと言える。このことについては百二十周年記念誌の方に執筆したので、ここで詳しくは述べないことにする。今日は、私が見聞きし、そして感じた、「男子校」から「共学校」への変化について書いてみようと思う。

まだ男子学年が残っている時に入学して、おもしろい経験をした、と私は思っている。男子学年と共学学年の両方を同時に見ることは、滅多にできることではないからだ。先輩達から共学化の準備が大変だったことや、共学化一年目の試行錯誤についてはよく話を聞いた。また、思わず笑ってしまうような逸話もあった。

例えば、生徒会役員になってすぐの頃こんな話をされた。共学化前、生徒会室はゴミに埋もれ、プリントが散乱し、床が見えないほどだった。共学直前に掃除をしたが、それでも散らかっていたそう、女子生徒が入った生徒会の初仕事は生徒会室の大掃除だった。ゴミ捨てに、全員で何往復もしたと言っていた。私は最初にこの話を聞いた時、誇張しているのだろうと思っ

た。いくらなんでも、床が見えないということはないだろう、と。ところが生徒会室を訪れたOBは皆まず「床がある」と言って驚くのだ。それで、どうやら本当だったらしいと分かった。共学になると、男女が互いに刺激となって勉強や諸活動が活発になる、とはよく聞かれる話だが、校内の整頓をするようになったことも、このことの一例と言えるのではないだろうか。

その反面、共学化になっても変わらない部分もある。一瞬ではあったが、私は、パンツ一枚で三年教室の廊下を歩く男子の先輩を見た。確か、私はびつくりしてその場を逃げ出したかと思うが、あの時、「あれが安高生なんだ」と何故か心の中に強く残るものがあった。共学化になっても安高生は、個性豊かでのびのびしている。無論、パンツまでいくと安高生全体と言うより、個人のことになるとは思うが。

「男子校」から「共学校」への変化は、困難な面も多くあっただろうが、私達は逆にその困難を楽しみに変えて過ごしてきたのだと思う。ただ頭を抱えて悩んでいるだけでは、何事も進まない。

さて、最近の話であるが、六月に教育実習生の名簿を見ていた二年生が、私にこう言った。「女性の人は来ないんですね。」

実は、こう言ったのは一人ではなかった。三月に共学一期生が卒業したばかりであるから、まだOGが教育実習に来ることは有り得ない。私は思わず笑ってしまったが、これはよい傾向なのだろう。後輩達は、男女共学化を普通のこととしてすんなりと受け入れている。つまり、男女が共にいることが普通だと思っている。共学化に関して、成功だとか失敗だとか言いまわすことはできないが、私は、良い方向に進んでいると思う。

今後の安積がどのように進んでいくかは、後輩達次第であろう。現在の活動のみでなく、男女共に、もつと新しいことへチャレンジして欲している。そして、いつも生徒の笑い声が絶えない、楽しい安高であって欲しい。

真の安積の姿を求めて

現生徒会長

熊田純子

(百十九期)

私は昨年、生徒会役員として生徒会活動に携わってきた。その経験を生かし、より充実した学校生活を送るための生徒会のあり方を考えたと思います、今年には生徒会長として、学校の様々

な活動に参加している。このような立場で生徒会活動に関わっていると、安積のすばらしいところ、そして、現在の安積の問題点が、いろいろと見えてくる。

安高生のすばらしさ、それは、自分の将来のビジョンをしっかりとして持っている人が大勢いるということである。友達とおしゃべりでも、将来についての話題が出ることもあり、私の大半の友達が、こんな職業に就きたい、あんなことをやってみたい、という将来の展望をしっかりと持っているのだ。そして、それに向かってコツコツと努力を重ねている。将来を見据え、ひたむきに努力している人の姿はとても格好のいいものである。また、自らの将来だけでなく、日本や世界の未来に目を向け、自分には何が出て来るかを考えている人がたくさんいるということに、私はただただ感嘆するばかりだ。

それだけではない。生徒の意見が学校生活に反映されやすい、という点も安積の良いところである。例えば、「Tシャツの通気性が悪いため、素材の違うものにして欲しい」「女子ジャージの生地を丈夫なものにして欲しい」などの要望を、学校側はきちんと受け止め、改善される方向へと向かった。このことは、生徒が現在の状況に対し不満を言うだけでなく、何が問題で、

どう改善していくべきかという気持ちで、アンケート等を通して伝えていくという、安高生の積極性によるものだと思う。このように、生徒が主体となり、学校生活をより良く変えていくことのできる環境を考えても、安積はとも恵まれている学校だと思う。

反面、この恵まれた環境を十分に生かし切れていない現状もある。安積がより良い方向に変化していくことを拒む生徒はどこにもいない。しかし、一方で、「変えること」「行動すること」を面倒だと感じ、意見を発することに消極的になっている生徒が大勢いるのも現実である。例えば、安積独自に行っている生徒職員協議会への参加状況についても疑問を抱いてしまう。こうしたすばらしい場が提供されているにもかかわらず、参加者数が少ないのである。これは、誰かがやってくれるだろう、誰かが考えてくれるだろうという思いが、多くの生徒の中にあるからではないだろうか。生徒を中心とする良い環境があり、画期的な意見をもっていたとしても、その人が一歩前に出ないことには何も始まらない。安高生には「自分にも『変える力』がある」という自信を持つて、もつと積極的に意見を出し、そして、行動して欲しいと思う。

そのためには、生徒会のあり方も大きく問わ

れるだろう。生徒と学校間の橋渡しの存在である生徒会のあり方を、謙虚に振り返ることから始めるべきなのかもしれない。一人一人の意見を引き出し、それが生かされるような体制になっているだろうか。生徒会に距離感を抱いている人はいないだろうか。生徒会を身近に感じ、一人一人がその一員であるという自覚が持てるような雰囲気になっていくだろうか……。現在の活動を見つめた時、どこかに、今までの方法でよいという甘んじた考えがあったことも否めない。このようなことから、生徒会としては、生徒会と一人一人の生徒の関わりの一つ一つを見直し、生徒が自分の考えや学校への要望などを、もつと出しやすい環境を整えていきたいと思う。そして、安積をさらに活気のある学校にしたいから良いと思う。

安積は今年百二十周年を迎える。これまで、数多くの先輩方がすばらしい歴史と伝統を築き上げて下さった。しかし、これに甘んじてはいられない。

安積の開拓者精神を一人一人が持ち、今自分が理想とする安積の姿を追究しながら、新たな歴史や伝統を創っていかねばならないと考える。

真の安高生を目指して

渡邊 匡彦

(百二十期)

高校合格を勝ち取るために、悪戦苦闘していた頃から、早四カ月。僕達は今、安積高校の生徒として充実した生活を送っている。四月、入学したばかりの僕達は、何もかもが新鮮で発見と驚きの連続だったが、少しずつこの新しい生活にも慣れ、有意義な日々を送っている。一人一人個性豊かな友人達と過ごす高校生活は、これもまた個性豊かな先生方によるハイレベルな授業や忙しくもやりがいのある部活動、様々な課外活動など、とても充実している。その中で、この伝統ある高校の「個性」とも言える部分が、分かり始めたような気がする。

まず一つが、安高生の「表現力」の豊かさである。僕はある課外活動で、色々な人が、自分の見学したことについてスピーチするのを聞く機会があったのだが、その発表の場で大きな衝撃を受けた。一人一人の発表が違うのは当たり前だが、話し方も、話すものも全く異なるのに、皆説得力と分かり易さを兼ね備えた発表だったからだ。持っている知識を総動員して一生懸命に話す人もいれば、呼びかけるように、または

訴えるように話す人、身振り手振りを使って熱心に話す人もいた。図や写真を使っている人、まるでセールスマンのようにユーモラスな話をする人、その一つ一つが、僕にはとても新鮮に感じられ、心に伝わるものがあつた。日本人には足りないと言われる、プレゼンテーション能力（発表し、理解させる力）を、安高生は持っている。これは素晴らしいことで、他に誇れるものだと思う。

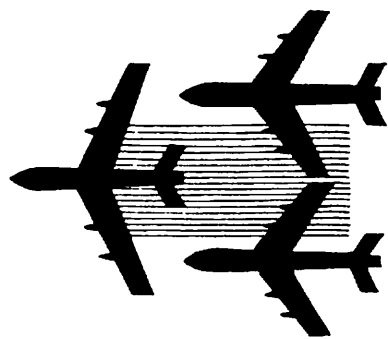
もう一つ驚いたことは、安高生の団結力の強さだ。全校応援となつた夏期高校野球準決勝。気温30度を越える猛暑の中、試合と共に応援団率いる安高の大応援が始まつた。先制点を取られた。しかし、安高の応援は決して弱まることはなかつた。勝っているときは気分が乗って大きな声を出せるが、負けているときはなかなかできない。しかし、安高の応援は、むしろピンチになればなるほど声を張りあげ、身を乗り出し、選手を盛り上げていった。僕はその姿に驚きながらも、共に応援していった。結果は残念ながら負けってしまったが、安高生の団結力を確かめられた一戦だつたと思う。この団結力があからこそ、体育祭や様々な行事も盛り上がり、あの紫旗祭もつくり上げることができると思う。

安高には、「質実にして真摯な人物を養成する」という教育方針がある。僕は中学の時、「真摯」の意味が分からず、調べたことがあつた。真摯とは、まじめでひたむきなこと。実際に安高に入学すると、その意味がよく分かつた。皆あることにひたむきな人達ばかりなのだ。勉強にひたむき、部活にひたむき、その他にも色々なひたむきさがある。このひたむきさが、自己を高めることに繋がり、あの表現力のもととなり、ひたむきな人同士がお互いに認め合い、あの団結力を形作っているのだと、僕は考える。

今年、安高は記念すべき百二十周年を迎える。僕は、一世紀以上の歴史と伝統を持つこの高校の、節目の年である百二十期生になれたことを誇りに思うし、同時に強い自覚を持つ必要があると感じている。安高には今、永い時が構築した伝統がつくられている。僕は、その伝統を崩さずに自分達だけの何かを加え、百二十期独自の伝統をつくり上げるといふ役割を担っている。それは言葉で言うよりも難しいことで、生徒一人一人が自覚を持たなければできないことだ。しかし、自分の意見を伝えることができ、団結力があり、一生懸命さを持っている安高生となれば、それは必ず成し遂げられるだろう。僕も、少しでも力になれるよう、強い自覚を持

ち、日々努力していきたいと思う。

安高には、まだまだ独特の「個性」があるだろう。僕はこれからそれらを見つけ出し、自分の力にしていきたいと考えている。安積の精神である、開拓者精神・質実剛健・文武両道。これらこそが、安積の個性のもととなっているのだと、僕は思う。そして、これらを身につけたとき、真の安高生となるのだろう。新しい事に挑戦し、現状に満足せず、飾り気を持たず、何事にも一生懸命に取り組む。そんな理想の自分となるよう、安高生としての自覚と、強い意志を持っていきたい。



岩手桑野会だより

共学化女子一期生

佐藤 めぐみ

(百十七期)

何もかもが「初めて」だった高校三年間。共学化一期生、初めての女子生徒、初めての女子部員……そして、初めての女子卒業生。一度しかない共学化という時期に安積高校に入学し、女子一期生として高校三年間を過ごせたこととはとても幸せなことでした。下手な文章で申し訳ないのですが、いろいろあった三年間の中でも印象的だった出来事を少しだけ書きたいと思います。

まずは初めて先輩方と顔を合わせた新入生歓迎会。最高潮に盛り上がった先輩方のテンションの高さに、圧倒されてしまいました。私の持っていた「がり勉で物静か」という安高生のイメージはあつという間に崩れてしまいました。が、「これが本当の安高生なんだ」と、初めて目の当たりにした安高生の姿に、私は戸惑いながらも最高に興奮したのを覚えています。

そして何といっても応援歌練習。先輩方が見守る(見物する?)中、応援歌練習は始まりま

した。その緊張した雰囲気と応援団の恐ろしさ、私は涙が出そうでした。寒さと厳しい練習のために倒れた人もいました。しかし、そんな練習の辛さも、最後の練習の日、団長が私たちに言ってくれた「辛い練習よくがんばった。これでお前らも安高生だ」という優しい言葉と、今までに感じたことのない達成感により、全部吹っ飛んでしまいました。私は、このときになってやっと自分のことを「安高生」と自覚できるようになったと思います。

それから初めての大会。私は合唱部に入部していました。当時50名ほどだった部員のうち、女子はたったの11名。私は小学生の頃から合唱を続けていましたが、あんなに緊張したのは初めてだったと思います。「この曲をこのメンバーで少しでも長く歌いたい。」その一心で精一杯歌いました。結果はなんと銀賞。うれしいことに男声合唱も銀賞を受賞し、男声・混声共に東北大会に出場することができました。東北大会では、男声は銀賞、混声は奨励賞を受賞しました。

一から丁寧に指導してくださいました五十嵐先生、温かく見守ってくださいました諸先生方、女子の入部を認め熱心に指導してくださいました先輩方、いつも励ましあってきた同輩のみんな、応援して

くださった地域の皆さん、いつも支えてくれた家族。本当に感謝しています。本当に感謝しています。たくさんの方々から力をいただき、いつも楽しく活動することができました。そして様々な活動の中で、とても素敵な仲間ができました。私もこれからは、一OGとして愛する後輩たちを応援し、安積高校合唱団の更なる活躍を祈りたいと思います。

まだまだ書きたいことがいっぱいあるのですが、ありすぎて上手くまとまりません。安積で過ごした三年間は、どの場面もすばらしく、素敵なものばかりでした。高校生だった三年間を、私は女子高生ではなく「安高生」だったと思っています。それは、私なりに安積高校と一生懸命向き合い、安積の心・安積魂・受け継がれてきた様々な伝統を受け止めてきたからです。共学化に伴い、変わってしまったところは多々あると思いますが、これからは安積の良き伝統は変わることなく受け継がれていき、また新しい伝統が築き上げられて、安積高校がますます発展しますことを願っています。

安積高校、ありがとうございます。そして桑野会の諸先輩方、これからもよろしくお願ひします。